

たが、自治会執行委員会および3年生の熱意により10月4日から11日まで開催された。記念祭は3会場



### 第5回記念祭の体育祭

に分かれて行なわれ、体育祭・展覧会は本校、講演会・弁論大会・音楽会は宮川小学校講堂、公演は精道小学校講堂であった。講演は神戸大学教授塩尻公明氏の「善なる人間と幸福なる人間」、音楽会の出演者は関西室内楽団（神沢哲郎・小杉博英・伊達三郎氏）およびソプラノ独唱の浜田洋子氏、ピアノ伴奏の伊藤筍子氏であった。前年度の野球部全国優勝の刺激もあり、この年から従来の全関西高等学校優勝弁論大会にかわり、全国高等学校優勝弁論大会が開かれるようになって記念祭の行事に加わった。第1位には学校杯と兵庫県知事杯、第2位には準優勝楯と芦屋市長杯、第3位には芦屋市會議長杯が用意され、審査員長には朝日新聞社の八山作一氏があつた。第1回は台風13号やウィークデーの影響もあり、残念ながら出席した弁士の人数が予定より少なかった。ともかく、こうして1学期は校内大会、2学期は全国大会、3学期は前年からはじまった阪神間中学校大会というふうに弁論大会の年中行事が整った。全国大会は第6回から11月、さらに6月へと時期が変更されながら、1962（昭和37）年の第10回まで続いた。芦高がこのような全国的視野に立つ行事を主催できたことは、現在の芦高に思うにつけてもまさに感無量である。

この年は硬式野球部・ラグビー部・卓球部が、四国で開催された第8回国民体育大会に出場した。10月20日に出発し、野球・ラグビーは徳島、卓球は松山で試合を行なった。11月2日に秋の遠足が行なわれ、1年生は布引・修法ヶ原、2年生はクラス別に六甲・箕面・生瀬方面、3年生も同じくクラス別に

京都保津峡・奈良・箕面方面に出かけた。そして11月21日に全校マラソン大会が行なわれた。

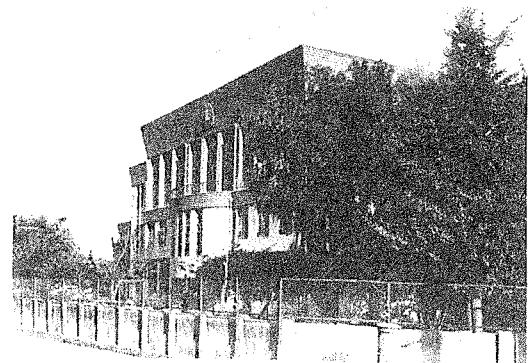
1954（昭和29）年2月27日に、芦高第6回卒業証書授与式が精道小学校講堂で行なわれ、第9期生男子331名、女子201名、計532名が卒業した。学力優等賞が3名、皆勤賞が8名、技能賞が2名、自治会賞が94名に授与された。

### 3 創立十五周年のころ（1954～57年）

本校野球部は第26回全国選抜高校野球大会に出場した。本校としては3度目の選抜であったが、4月3日に2回戦で対戦した鳴門高校に3-4で惜敗した。

1954（昭和29）年4月8日に第1学期の始業式があり、翌9日に入学式が挙行され、489名が入学した。本校の入学式は、通常は始業式当日の午後に行なわれていたが、講堂が台風の被害を受けて工事中であったため、この年は始業式の翌日に、宮川小学校講堂で行なわれた。4月23日に、3年生は九州方面への修学旅行に神戸港より出発した。4月28日に春の遠足があり、1年生は洲本、2年生は吉野に出かけた。この年も例年通り阪大生の教育実習が6月24日からと、9月6日からそれぞれ1週間実施された。

1学期末の7月17日に講堂竣工式が行なわれた。



改裝なった本館

講堂の改修工事は予想外に困難で、工事が長引いていたがようやく完成したのである。なお東側の控室と階段をつぶしてステージにあてることになり、改

装された講堂は従来より 66 平方メートルほど広くなつた。翌 18 日の日曜日には、講堂竣工記念公演会も開かれ、7 月 25 日には同窓会総会がこの新装なつた講堂で開催された。

北海道で開かれた第 9 回国体に山岳部が出席し、7 月 24 日から大雪山系で競技を行なつた。このころ山岳部がしばしば国体に出場し、県下の高校中でトップ級の実力を養つてゐた。

9 月 20 日に笠谷工務店の施工により、60 万円の建築費で 18 坪 (59.4 平方メートル) の食堂が完成した。職員・生徒間には以前から食堂建設を望む声があつたが、とくに本校と同居している武庫高校生にとっては、職場から直接登校して來るため、食堂の設置は切実な願いであつた。本校では校長が県当局に食堂建設を要望していたが、他に県費による設置の例がなく、実現しそうにもなかつた。ところが武庫高校同窓会の強力な陳情により、建築費として 20 万円が令達された。同時に、県は本校育友会に対し、前年の台風 13 号で破壊された野球のバックネットの修理費を出すから、食堂建築費の不足額を負担するようにと申入れてきた。バックネットは、育友会が資金を調達して第二運動場を建設した際にあわせて建設されたもので、その修理に県費を出せない性格のものであった。育友会の負担額は 25 万円であった。こうして建設された食堂は、10 月上旬の記念祭



食堂風景

におけるバザーで自治会がはじめて使用し、12 日から正式に使用開始となつた。なお食堂の経営は芦高と武庫高校の育友会があたり、両校の父兄・職員からなる食堂運営委員会が運営することになった。

10 月 2 日の前夜祭を皮切りに 3 月から 10 日まで、第 6 回記念祭が実施された。あいにく第 1 日目の体

育祭は雨天のため 4 日に順延となつたが、全国高等学校優勝弁論大会・音楽会・講演会・文化祭と例年通りの行事が順調にすすんだ。音楽会では 2 度目の記念祭出演になるヴァイオリンの遠藤磨里氏、ソプラノ独唱の樋木栄氏、ピアノ伴奏の真木利一氏が招待され、講演会では阪大教授伏見康治氏が「放射能について」の講演を行なつた。なおこの年の 3 月 1 日には「第 5 福竜丸」がビキニでのアメリカによる水爆実験で被災し、乗組員が放射能障害をうけて 1 人が死亡するという事件が起こつてゐる。

10 月 19 日に本館 1 階の改修工事がはじまつた。10 月 30 日には秋季遠足が行なわれ、1 年生は和歌浦・赤目・京都方面、2 年生は六甲・有馬方面、3 年生は奈良・京都・六甲方面に出かけた。そして 11 月 2 日には高松宮妃が本校を訪れ、本校ラグビー部と O B からなる芦屋ラグビークラブの試合を観戦した。

11 月 20 日の土曜日には、午前中に全校マラソン大会が行なわれ、午後から本校講堂に設置されたピアノ開き音楽会として、井口基成氏のピアノ＝リサイタルが開催された。昼の部は生徒公開、夜の部は一般公開であつた。7 月に新装なつた講堂には育友会の資金で諸設備が施されたが、ピアノについては、セミコンサート＝ピアノを購入することになり、100 万円の購入費が予定されていた。そこで飯野校長と音楽の出口教諭が、浜松の日本楽器に出張して調査にあたつた。その際、来日中のドイツのヴィルヘルム＝ケンプ氏の演奏会用フルコンサート＝ピアノが、校長らの目にとまつた。日本楽器では演奏会用として全国 7 カ所程に配置し、その後に引き渡すことであつた。とくに宝塚大劇場で使用する予定の 1 台は、ケンプ氏が指弾して最上のピアノと折り紙をつけたものであり、非公式の打診はあるもののまだ購入先が確定していなかつた。当時、兵庫県下にはフルコンサート＝ピアノは 1 台もなく、近畿地方でも 3 台があるのみであったといふ。校長は急ぎ帰校して育友会の了承をとりつけ、日本楽器と購入について確答契約した。その後、このピアノを譲渡してもらいたいとの希望が、竣工したばかりの和歌山県立公会堂をはじめとして相次いだ。しかし、本校ではすでに契約済みであるとして、これを断

校歌を唱って  
Aさんへの手紙

「Aさん卒業お芽出度う。お芽出度うと言つても、目前に控えた大学のことや、就職される人には社会のこと等で頭の中が一杯で、ぴったりとこないかもしませんね。しかし、入試も終り、気持に整理が出来れば、はじめて、卒業したのだという淋しさを感じられることでしょう。卒業の時の母校への愛着と、せきばくとした感慨には実際やりきれないものがありますね。

今日は卒業祝いの代わりに、僕の京都行楽に感じたことをお伝えします。

先日一月十五日、僕は二日間の連休を、何か有意気に使い度いものだと思い、九時頃弁当と地図とスケッチブックを手にして、国鉄に乗りました。丁度成人の日だったせいでしょうか、曇ってはいましたが、行楽客が割合多く見られました。

成人の日といえば、Aさんは、どの様にすごされましたか？外へ出る時学校の遠足では、多勢でゾロゾロと歩くでしょう？だけど、今度は一人だったせいか、全く自由で時間を自分のものにした計画が出来ました。

京都駅からバスで嵐山まで行き、雪解け道を苔寺へ歩きました。やはり京都だという感じですね、雪が山や屋根を白く覆っていて……。苔寺は西芳寺というものが本当らしいです。連日の受験勉強で疲れているでしょうが、一度気ばらしに、あの雰囲気の中へととけこんでみるのも良いだろうと思います。薬など飲より良いですよ。

若い人達が案外沢山行っています。ほとんどが二十代の所謂若い世代の人達です。数人の青年が七十余りのおばあさんとつれだっていかにも楽しそうに、庭園を散歩していました。本当に平和そのものでした。僕がどうしてこんなことを書くか、おわかりでしょうね？寺は大和、庭は京都と言います。今度は二人で出かけませんか、亀井勝一郎さんの大和古寺風物誌でも持って……。

話はそれましたが、その青年達は皆20前後の様でした。おばあさんが、何度も、くりかえしきりかえし「今日はよう連れて来てくれた」と、若い人

達に礼をいっていました。美しい光景でしたよ。苔寺の門までつづく築地のところに、“禅寺の苔を啄む小鳥かな”という歌碑が立っています。

帰りに茶店で甘酒を飲みましたが、茶店の雰囲気がよくマッチしていました。

苔寺から天龍寺への道で不愉快な目に会いました。雪解けで、水たまりの出来た道を高級車が遠慮ようしゃもなくどろをはねかけていきます。人一倍感じやすい僕のことですから、腹がたってなりません。車の中でふんぞりかえっている奴の顔に、つばでもひっかけてやり度い程でした。それが、すぐに階級意識に飛躍します。実際日本程金持にとって住みやすい国はないでしょうね、反対のことも言えます。貧乏人の住みにくい国日本です。結局、大きく言えば、歴史は、階級闘争のくり返しに過ぎないのでしょうがそういう、どろをかけるものと、かけられるもの、そんな矛盾や、不正に一番強く憤りを持つのは、若い人を於ては無いでしょうね。僕達の持っている若さということ、この上ない宝です。学校の図書館に“君らこそ日本を”という本があります。若い世代へ少々哲学的になりますが、わかりやすく書いてあります。一度読まれたら良いと思います。他人の褲で相撲を取るようですが、僕の卒業を祝う言葉の代わりにして下さい。

実際、大人とか年寄り、もちろん、全てではありませんが、腹の立つ奴が多いですね。その腹の立つ者の類に入るような奴が、代議士でござい、政治屋でございと、いばってるんですからね……。僕がいつも感じることは、無理なこと、道理にあわないことでも易々諾々と、あまんじて受入れる。そんな人でも、僕達の様に、学生時代、若い時代には義憤を感じ、悪を論じたであろうに、いつの間にか、年ましても全然無関心になってほしくありません。

龍安寺の石庭を見ました。何かありますね、それが何かはわかりませんが……。皆じっと、縁に座つて見ていました。わかった様な顔をして、ほこら顔に説明している人も居ました。僕には、とてもこっけいでいた。夕暮の龍安寺を出て街に出ると（電車で四条大宮まで帰りました）まるで別世界です。パチンコの音と、自動車の騒音が、気狂いじみた交響

曲を聴かせてくれました。

日本人が一年間に、パチンコに費やす金が、八百億円だそうです。それに比べて、書籍の購入に費やすのが三十億円、文部省の科学研究費が十二億円と本で読みました。情け無い話です。実際、目の色変えて玉の行方を追っている大衆には、平和とか、自由とかいったところで、こちらが一人相撲をとっている様な気がしてたまらない気持になります。国民が直径1cm程の鉄の玉に血眼になっている間に、同じ玉でも、ゴルフの玉を追う種族の人間に、うまくやられていることを思えば、じつとしてはいられません。

今に火薬の入った玉を体の中にぶちこまれる様になるかもしれませんね。

余り長くなるのでこの辺でペンを擱きます。とにかく、良い一日でした。こうして書いていても、目に浮かびます。

もうすぐ選挙がありますね。Aさん、こんな場合どうしますか。今、どうしても金が必要である。ところが全然アルバイトの口がない、たゞ選挙運動のアルバイトで、Aさんの最も、軽べつしている保守系の候補だけが、やとってやると言っている。もちろん報酬は多い。ところが思想的にも人格的にも共鳴出来ない。

こんな極端な場合でなくとも、とにかくこんな場合どうしますか？

イデオロギーはイデオロギー、金は金と、割切ることが出来ますか？

これからは、Aさんも、いろいろの問題にぶつかることにつれて、ひくつになってしまふ。僕はそんな人達の中に、未来の自分の姿を見る様な気がして、時々、自分への嫌悪の情をおさえることが出来なくなります。

Aさん、せめて僕達は、今の若い世代の人達はどんな世の中になんでも——僕達がこれからの社会を創るのですが——、悪は悪、不正は不正として、負けないようにしたいものです。

話を元に戻します。苔寺から、天龍寺、太秦の広隆寺へ行きました。広隆寺には、国宝の弥勒ぼさつがあります。僕は去年の夏休み、先生やクラスの人

達と大和へ行きましたが、その時、中宮寺でも同じ仏像を見ました。僕は、広隆寺のものの方が好きです。Aさんはどうですか？

“仁和寺の僧”で有名な御室、仁和寺へ行き、そこから龍安寺まで歩きました。

お坊さんが鉢をかぶってとれなくなつた話、そんなエピソードを知つていて寺を見れば、又別の味があります。良い所でした。仁和寺の境内で遊んでいた子供に「毎日こんな所に住めてイイだらう？」と聞くと、「一寸も良いことない。皆よく来るけど何が良いのかわからぬ」と言つていました。もちろん京都弁です。僕の質問も少々野ばかりですが、環境に馴れるということ——おそろしいことですね。マヒしてしまうと言うか、自分の周囲がわからなくなります。そこでAさんにお願いがあります。今も書きました様に僕達は自分の周囲がわかっている様でわかりません。中学を出て、蘆高へ入った時には、色々のこと気につきました。あ、もしてほしい、こうもしてほしい、こゝは悪い……と、ところが、いつの間にか、無感覚になることが、よくありますね。Aさんが学校を出られて蘆高を客観視出来るようになれば、そういう点、多く気づかれることでしょう。良いところも、悪い所もそんな事を教えてほしいと思います。そういう意味でも卒業なされるでしょうが、どうか、学生時代の純潔な心を失わないようにして下さい。

むつかしいことでしょうが……。いつかAさんは、母校に対して「何もせずに卒業する、自分が情けない」となげいていましたね。僕はそんなこと心配する必要はないと思います。

どうか胸を張って、力一杯校歌を唱つて卒業して下さい。

又、いつか会いましょう。Aさんは僕等の先輩ですからね。それではさようなら。

卒業されるAさんへ

児玉 隆也

二月二十六日

(「芦高新聞」第56号)

わった。

宝塚での演奏会当夜、校長らは他に奪われぬうちにとこれに出向き、演奏会終了後にケンプ氏と握手を交わしてピアノに氏の署名をもらった。まもなく本校に引き取られたこのピアノの弾きはじめの演奏会には、前述のように井口基成氏が招かれ、さらに翌年の記念祭にはテノールの柴田陸陸氏が招かれるなどした。こうして県下最初のフルコンサート=ピアノは、それにふさわしいデビューを飾ったのである。

11月27日の土曜日放課後に第7回校内弁論大会が開かれ、22名の出場者が熱弁をふるった。12月1日には自治会新旧役員交代あいさつのための生徒大会が開かれた。そして4日の土曜日放課後にE・S・S主催の第1回英語暗唱大会が、さらに18日の同じく土曜日放課後には図書部主催の文化映画会が行なわれた。

1955（昭和30）年2月9日に、京都市立美術館で開催中のルーブル展見学が行なわれた。そして26日に芦高第7回卒業証書授与式が行なわれ、第10期生男子351名、女子170名、計521名が卒業した。学力優等賞が2名、皆勤賞が9名、自治会賞が113名に与えられた。なお、この日発行された「芦高新聞」第56号に、第7代自治会長は「校歌を唱ってーAさんへの手紙ー」なる一文を寄せている。

1955（昭和30）年4月2日には本校講堂で日本青年交響楽団の演奏会が開かれ、8日に1学期の始業式が、翌9日に入学式が行なわれて527名が入学した。この年は芦屋高等学校創立15周年にあたっていた。1940（昭和15）年4月に岩園の仮校舎で芦屋中学校として出発した本校は、日浅くして県下の伝統校に亘り、その名声は広く知られるようになり、今や充実と発展の時期を迎えていた。しかしながら、本校が生徒定員1500名、30学級という学校規模に対し、普通教室・特別教室あわせて37教室、準備室6というように施設・設備面はまだまだ不充分であった。また校長以下教諭56名、事務職員・実習助手・校務員等18名、計75名という教職員数は文部省の基準を下回るものであった。なおこの年の校務分掌は総務課・教務課・補導課・生徒課・管理課・図書課

からなり、現在とはかなり異なっていた。また4月27日の生徒大会で決定された1955（昭和30）年度の自治会予算は、総額184万3000円に達し、そのうち書記外局は33万6000円、文化部は35万7400円、運動部は72万4400円で、予算額がもっとも大きかったのは硬式野球部の14万円であった。

4月18日に念願の16ミリトーキーの映写機を購入して試写が行なわれた。そして5月30日を第1回として、図書部主催のもとに講堂において隔月に、ニュースと文化映画が上映されるようになった。5月2日に春の遠足が行なわれ、1年生は洲本、2年生は吉野に出かけた。7月14日には3年生の修学旅行のうち、信州班が国鉄芦屋駅を出発した。九州班は台風のために延期となり、7月20日の終業式日の夕方6時に神戸港より別府にむけて出発した。なおこの年の5月11日には宇高連絡船紫雲丸が沈没し、修学旅行の児童・生徒168名が死亡するという痛ましい事件が起こり、5月16日に文部省は修学旅行の事故防止心得を通達している。また18日より時報にオルゴールが使用されるようになり、19日には講堂で狂言鑑賞が行なわれた。夏休み中には、前年の本館1階の改裝に引き続いて2・3階の廊下ならびに教室壁面の改裝工事がすすめられ、8月31日に完了してようやく本館は建物らしくなった。

創立15周年を迎えるにあたり、年度当初より学校・育友会・同窓会で記念事業の計画が立案され、記念誌発行費・式典費・祝賀費など計58万円が予算に計上された。このうち育友会は38万円、同窓会は20万円を負担することとなり、1口200円の寄附募集が、育友会では5月10日の評議員会ついで6月6・7日の学年別総会で承認され、同窓会では5月1日の幹事会で承認された。こうして6月から寄附募集が開始された。6月11日には学校・育友会・同窓会に自治会を加えて、4者からなる芦高十五周年記念事業企画運営委員会が開かれ、総務・財務・編集の各委員会がそれぞれの業務に着手した。

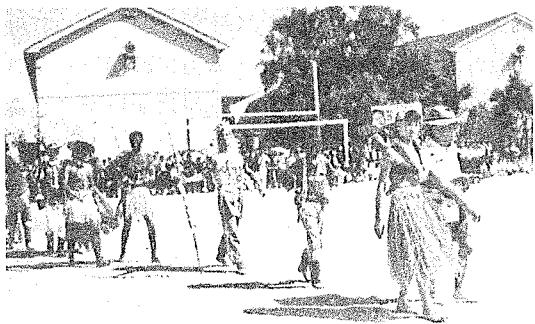
なお自治会では、1人100円の臨時会費徴収による15万円の予算で、独自の記念事業を計画し、これは執行委員会および代議員会の修正をへて6月24日の生徒大会で承認された。自治会の計画は、文化部・

運動部・書記外局各部の部史編纂、植樹、略旗作製などであった。部史は「芦笛」第9号に創立十五周年記念特集号としてまとめられ、植樹は本館前庭の整備ということで11月19日に完成した。この時に、現在も生徒たちの憩いの場となっている藤棚が拡張整備された。そして略旗は本校の中西教諭デザインで10月5日に製作が完成し、自治会の行事が行なわれる時は、本館屋上の西南隅に掲揚されるならわしとなった。また創立十五周年記念祭参加行事として、全芦高管弦楽団が6月20日に第3回演奏会を開き、「白鳥の湖」などを演奏した。ついで演劇部は6月27日に校内発表会を行ない、トルストイの「人は何で生きるか」を上演した。

さらに創立十五周年記念式典について行なわれる記念祭についても、自治会は全員参加の意義あるものにするため、生徒の手になる「記念祭賛歌」（作詞下村雅信・作曲中島良能）をはじめ、ポスターや記念祭バッジ・プログラム表紙のデザインを広く募集し、投票で決定することにして着々と準備をすすめた。

記念誌の誌名は6月11日の記念事業企画運営委員会の席上で「芦高十五年史」と決定し、ただちに資料の収集が開始された。しかし、開校前後は資料は全くの空白状態といってよく、そこで当時の新聞記事を利用することになった。夏休み中の8月7日に歴代育友会長座談会、9日に旧職員座談会、21日に1・2回生座談会、戦後卒業生座談会が「芦高十五年史」編纂のためにもたれた。2学期に入ると作業が急ピッチですすみ、10月8日に231ページ、3000部の「芦高十五年史」が発行された。

10月8日、午前10時より芦高創立十五周年記念式が挙行され、午後4時より第7回記念祭前夜祭が行なわれた。翌9日から16日まで、体育祭・全国高等学校優勝弁論大会・音楽会・講演会・映画会・文化祭・終幕祭と多彩なプログラムが組まれ、創立15周年を飾るにふさわしい記念祭となった。音楽会は柴田陸陸氏のテノール独唱、講演会は朝日新聞論説委員吉村正一郎氏の「自由について」であった。また9日の体育祭には、7名の体操選手が招待されて体操の模範演技があり、最終日には、愛知県刈谷高校



#### 第7回記念祭における体育祭の仮装行列

(サッカー) および奈良県高田高校（硬式野球）との招待試合があった。

11月2日に1・2年生は秋季遠足に出かけ、3年生は1学期の修学旅行延期の影響を受けて授業が行なわれた。11月7日に育友会評議員会が開かれ、体育館建設をめざす十五周年記念事業基金の積立が決定し、27日の育友会総会で承認された。当時、体育館は県の費用で建てるにしても、土地は地元が用意する慣行であった。しかし、校地の狭隘な本校としては体育館建設にあてるべき土地がなかった。建設用地の候補として、第二運動場東側の田地約1000坪が考えられ、地主の好意で時価で譲渡されることになった。そこで育友会としては、毎日100円の積立をして5年後に1000万円を用意し、土地を確保しようと計画したのである。実際に、この積立金は体育館建設用地購入費として用立てられ、さらに中館増改築の際に、地元負担金を銀行から融資してもらうための担保として大いに役立った。在校生が卒業するまでに体育館建設は実現しないにもかかわらず、将来の芦高を思う父兄の善意がこの計画を押しすすめたのである。

また1948（昭和23）年6月から施行された育友会会則がこの時に改正された。旧会則では校長は育友会長のもとに副会長とあったのを、「会長は学校長と緊密なる連絡のもとに会務を総理し本会を代表する」として校長を別格的な存在とし、かわって教頭が副会長を務めることとなった。さらに会長についても、年度当初の総会で予算の決定とともに選任されるのではなく、前年度末の3月の評議員会で選任され、予算作成などの育友会の事業計画にはじめか

ら関与できるようになった。

11月19日に恒例のマラソン大会があり、ついで自治会役員選挙が行なわれ、さらにこの日、前述の本館前庭の整備が完了した。期末考査終了後の12月19日の午前中には、大阪市大藤田教授の講演「京大ヒンズーケシ探検報告談」があり、午後にはアイヌ風俗習慣鑑賞会が開かれた。

この年の運動部の活躍としては、まず5月15日に軟式野球部が近畿大会に優勝したことが挙げられる。山岳部は神奈川県で開かれた第10回国民体育大会に連続出場し、10月30日から丹沢山系で行なわれた競技に参加した。また軟式庭球部や拳闘部もそれぞれ全国大会で活躍した。さらにサッカー部は1956（昭和31）年1月2日から西宮球場ではじまつた第34回全国高校サッカー選手権大会に出場し、函館東高校ついで上野高校を破って準決勝に進出し、4日の秋田商業高校との試合に1-2で惜敗した。この大会で季昌碩君が優秀選手賞を受けた。

1956（昭和31）年2月25日に、芦高第8回卒業証書授与式が行なわれ、第11期生男子325名、女子199名、計524名が卒業した。学力優等賞が3名、皆勤賞が28名、功労賞が1名、技能賞が1名、自治会賞が160名に与えられた。

なおこの1955（昭和30）年度の進路状況は、卒業生524名のうち就職者が127名（男子32名、女子95名）、進学者が177名（男子120名、女子57名）で現役の進学率は45パーセントであった。また現浪あわせての国公立大学進学者数は京大4名、阪大9名、神戸大18名、大阪学芸大6名、大阪市大18名、神戸大9名など計115名、私立大学進学者数は早大3名、慶大2名、同志社30名、立命館15名、関西大30名、関学59名、甲南15名など計313名であった。このころから、さかんに入学難とか就職難とかが言われるようになり、高校の予備校化も指摘されるようになった。ちなみにこの年の3年生に対して、5回の定期考査以外に5月に実力考査、7・9・11月に摂丹地区共通模擬試験、1月に県下一齊模擬試験が実施された。

本校野球部は、この春の第28回選抜高校野球大会にも出場し、4月3日に苦小牧工業、6日に日大三

高を破って7日の準決勝で優勝候補筆頭の中京商業と対戦し、0-6で敗れた。しかし、この大会で渡海昇二・寺本勇両君が優秀選手賞を受けた。

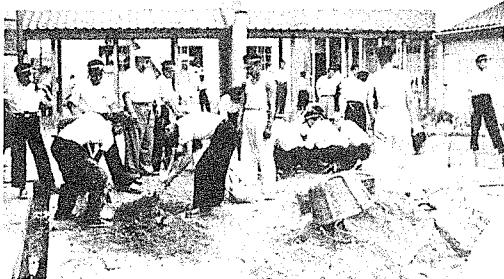
1956（昭和31）年4月9日に第1学期の始業式があり、ついで午後から入学式が行なわれ、3月16・17日実施の進学適性学力検査に合格した535名（志願者655名）が入学を許可された。翌10日には、早くも3年生が箱根・東京・日光方面と長崎・阿蘇・別府方面へ2班に分かれて修学旅行に出発し、16日に帰宅した。なお15日には、本校第3代校長の飯野竹二郎氏が願いにより学校長を免ぜられ、翌16日に県立加古川東高等学校長清水敬治氏が本校校長に補せられた。「芦高新聞」第63号において、飯野前校長は「教職の最後を芦高で閉じることの出来た幸福を、しみじみうれしく感謝しております」と述べた。また清水新校長は、「第一に勉学の精進を」さらに「運動を一層奨励する」ということを強調した。

1951（昭和26）年7月に改訂発行された「高等学校学習指導要領一般編（試案）」について、1955（昭和30）年12月5日に「高等学校学習指導要領一般編」が改訂発行され、1956（昭和31）年度から高等学校の教育課程が改められることになった。この改訂の趣旨は、高校教育により計画性をもたせる観点から、従来の広範な選択教科制を廃し、教育課程の類型を設けるとともに、必修教科・科目をふやしてできるだけ教養のかたよりを少なくしようとするものであった。本校では従来の自由選択制のもとでも、上級学年において生徒の進路にもとづく就職・文科・理科の類型的なクラス編成が行なわれていたが、この改訂をうけて社会・理科の履修方法が改められた。そして1958（昭和33）年度より、県の基準案を参考に全面的に類型的教育課程が採用され、2年生では一般・文科・理科の3類型に、3年生においては一般・文科Ⅰ・文科Ⅱ・理科Ⅰ・理科Ⅱの5類型に細別された。また「学習指導要領」の改訂により、共通必修・選択必修計38単位は39単位に増加した。さらに教科・科目も商業が職業・一般社会・時事問題が社会・一般数学・解析Ⅰ・解析Ⅱ・幾何が数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学Ⅲ、図画が美術へと改められるなどした。同時に「指導要録」も改訂され、保存期間

は20年とするなどの取り扱いや、出席単位・履修単位・行動の記録などの記入上の改善がなされた。

5月2日は遠足の予定であったが、雨天順延となり、この日は1・2年生はアサヒアリーナで開催中の原子力平和利用展を見学した。なお前年の8月6日には第1回原水爆禁止世界大会が広島で開かれ、1957（昭和32）年8月には東海村の原子力研究所の原子炉が臨海点に達している。そして5月4日に1・2年生の春季遠足、7月17日には校内弁論大会が実施された。

9月1日から、本館2階にあった給品部が本館と中館の中庭に移転した。育友会と県が約30万円の費用を負担し、夏休み中に工事が行なわれていたものである。また中館と南館の中庭には、この



中庭を整備する生徒たち

ころ美化部の手によって花壇が完成した。やはり暑い夏休みの間に、生徒たちが黙々とモッコを担ぎ、シャベルを握り、さらにはセメントを練って作業をすすめてきたものである。

この年は、兵庫県で国民体育大会が開催予定のため、例年10月10日の創立記念日のころに実施されていた記念祭は、時期を早めて9月23日から30までの期間に行なわれることになった。22日の前夜祭にはじまった第8回記念祭では、体育祭・全国高校優勝弁論大会・校内音楽会・招待音楽会・講演会・映画会・文化祭の各行事が行なわれた。26日午後の招待音楽会には、カール＝チェリウス氏指揮の京都市交響楽団が招かれた。京響は5月に設立されたばかりで、6月に第1回演奏会を開いて好評を博し、この時までに3度の演奏会を開いていた。また27日の講演会には、5月9日にマナスル初登頂に成功した

日本山岳会マナスル登山隊の隊員今西寿雄・徳永篤

司兩氏が講師として招かれ、「マルナスより帰りて」の講演があった。なお記念祭中の28日に3年生を対象に文部省の全国抽出学力調査が実施され、また講堂に収容しきれないなどのために生じた空き時間を利用してソフトボール大会が行なわれた。

すでに創立15周年を迎える以前から、記念祭の1週間は長すぎるという声があった。記念祭のマンネリズムや受験競争の激化から考えると、期間の短縮や時期の変更、行事の分割などの論議が当然のことながら起こっていた。自治会執行部は十分このことを承知していたし、この年の記念祭を有意義なものとするべく努力もした。しかし、記念祭が転換期にあることも事実であった。

この年は、第11回国民体育大会が10月28日から11月1日にかけて兵庫県で開催され、硬式庭球部の半那毅男君と4月15日に発足したばかりの体操同好会および桂広保教諭が兵庫代表として出場した。とくに硬庭の半那君の活躍はめざましく、7月の全国高校選手権大会で優秀選手賞を受け、8月の全日本ジュニア選手権にも出場し、そして地元の芦屋テニスコートで行なわれた国体では、甲南高校の平野君と組んで高校男子の部で見事に優勝した。また軟式庭球部も8月の全国高校選手権大会に出場した。

スポーツといえば、この年はオリンピック開催の年であり、11月22日からメルボルンで大会が開かれた。それに先だつ11月14日本曜日の2年生のホームルームの時間に、毎日新聞運動部長の南部忠平氏の講演会が開かれた。氏はかつてのロサンゼルス＝オリンピック金メダリストである。

11月2日に秋季遠足があり、24日に自治会役員選挙が行なわれ、12月1日にはE・S・S主催の校内英語暗唱大会が開かれた。ようやく2学期が終ろうとするころ、全国的にとくに阪神間では流感が猛威をふるいはじめた。期末考査前日の13日には、1年生の欠席者が109名に達した。そこで2・3年生は予定通り試験を行なうが、1年生は試験を延期して2日間の家庭学習となった。しかし、それでも欠席者は減らず、試験はどうとう3学期初めに実施されることになった。

12月21日には本校図書館で、毎日新聞の那須外信

副部長を招いて「中東ハンガリア問題」と題する講演があった。まさに10月にはスエズ動乱およびハンガリー動乱が起こっていた。また10月19日の日ソ共同宣言について、12月18日の国連総会で日本の国連加盟が承認され、日本の国際社会への復帰が本格しようとしていた。

1957（昭和32）年1月9・10日の両日に3年生および2年生の一部に対して県下一斉模擬考查が実施され、1年生に対しては延期されていた2学期期末考查が行なわれた。2月9日に恒例のマラソン大会が実施された。これまでマラソン大会は、11月に全校マラソン大会として行なわれていたが、この年から2月に実施されるようになり、3年生を除いた1・2年生による校内マラソン大会となった。

2月26日に、第9回卒業証書授与式が行なわれ、第12期生男子287名、女子192名、計479名が卒業した。学力優等賞が3名、皆勤賞が37名、技能賞が1名、自治会賞が131名に与えられた。3月18・19の両日には進学適性学力検査が実施され、22日に合格者発表が行なわれた。

#### 4 中館改築のころ（1957～60年）

1950年代後半は、教育をめぐる対立が先鋭化した時代であった。すでに1954（昭和29）年5月には、「義務教育諸学校における教育の政治的中立の確保に関する臨時措置法」および「教育公務員特例法の一部を改正する法律」のいわゆる教育二法が国会で成立し、6月に公布されて教員の政治活動が禁止されるようになった。また1955（昭和30）年8月から11月にかけて、日本民主党は「うれうべき教科書の問題」（第1集～第3集）を刊行し、教科書のあり方が政治問題化しつつあった。さらに1956（昭和31）年3月に政府は「地方教育行政の組織運営に関する法律（地方教育行政法）案」および「教科書法案」を国会に提案した。前者は教育委員会を公選制から任命制に改め、教員の任命権を県教育委員会に移し、文部大臣の指導・助言・教育事務処理の是正措置要求などの権限を認めるものであった。この法律は日教組や学者の一部などの強い反対をうけながら、国

会で可決され、6月30日に公布された。後者は審議未了で廃案となつたが、文部省は10月10日に省令で教科書調査官を設置した。

11月に愛媛県教育委員会は勤務評定による教職員の昇給・昇格の実施を決定し、1957（昭和32）年12月には全国都道府県教育委員長協議会が勤務評定試案を決定した。これに対して日教組はただちに勤務評定反対阻止闘争強化を決議し、「非常事態宣言」を発表した。そして1958（昭和33）年春から秋にかけて全国で大規模な反対運動が展開され、休暇闘争や勤評裁判にまで発展した。その過程で神奈川方式による妥協の道が求められたりしたが、日教組は問題の本質を教育全体に対する国家統制にあると認識するようになった。

兵庫県でも同年3月に開かれた勤評反対県民大会を皮切りに、反対運動が高教組・兵教組を中心に展開された。9月15日の日教組による全国統一行動日には、本校でも正午で授業が打ち切りとなり、午後は各学年とも特別教育活動が実施された。こうして教育を取り巻く情勢が騒然とする中で、本校は中館の改築をはじめとする施設・設備の充実がすすみ、自治・自由・創造の校風のもとで着実な発展を続けていた。

1957（昭和32）年4月8日に第1学期の始業式、ついで午後には入学式が行なわれた。4月21日から3年生は九州・関東方面へ2班に分かれて修学旅行に出発し、25日に帰校した。この修学旅行は終始雨にたたられどうしで、九州班の場合、靴の乾くまもなかったという。旅行シーズンの混雑や気候、学校行事などとの関係から、すでに前年あたりから修学旅行の時期の検討を求める声があった。そしてこの年の旅行をきっかけに時期変更が急速に具体化し、2年生は、翌年の3月に修学旅行を行なうことになった。

4月26日には1・2年生の春季遠足が実施され、1年生は六甲山、2年生は吉野へ出かけた。この年も全国的にインフルエンザが流行し、とくに2年生の間で欠席者が多く、とうとう2年E組は6月10・11日に学級閉鎖となった。そして14日から3日間にわたって第1回兵庫県高等学校総合体育大会が開か